

Title	ブラジルのポルトガル語に見られる屈折の単純化について
Author(s)	河野, 彰
Citation	大阪外国語大学学報. 76(1-2) p.111-p.119
Issue Date	1988-11-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81201
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ブラジルのポルトガル語に見られる屈折の単純化について

河 野 彰

Sobre a simplificação das flexões verbais e nominais na linguagem popular brasileira

Akira KONO

Neste modesto ensaio, examinaremos as duas hipóteses acerca da simplificação das flexões na linguagem popular brasileira. A hipótese, desenvolvida por Naro e Lemle(1976) e Naro(1981), interpreta a simplificação das flexões, como o sinal de uma mudança sintática estar em curso no sentido de eliminar da sua gramática a regra de concordância verbal. Por outro lado, Guy(1981) considera que não existe nenhum sinal de eliminar a regra de concordância verbal, mostrando que o português popular do Brasil é um contínuo pós-crioulo, que envolve a partir de uma variedade crioulezada, reestruturando-se no sentido da variedade socialmente prestigiada.

ブラジルのポルトガル語は、新大陸に渡った英語やスペイン語と同様、ポルトガルのポルトガル語とは、音韻、形態、統語、語彙面にいくつかの相違がある。従来、ブラジルのポルトガル語は、ポルトガル南部の方言との類似が指摘されてきたが、現在では、ブラジルに渡ったポルトガル植民者の出身地に偏りはなかったと考えられている。そして、ブラジルでは、植民者が最初に定住した沿岸地域で一種の共通語化が進み、やがて、ポルトガルとは異なる規範（norma）が確立したとされている。⁽¹⁾ さらに、ブラジルのポルトガル語は、ブラジルのほぼ「大陸的」ともいえる国土の広さにもかかわらず、比較的に地域差が少ないことが、しばしば指摘される。例えば、Thomas（1969：xi）は次のように言う。

“The variety of speech within the great territory of Brazil is amazingly small. No Brazilian has any difficulty in understanding, on first contact, the speech of any region of the country, if we make exception for the relatively small percentage of regional vocabulary.”

しかしながら、ブラジルにも地域方言が存在しないわけではないが、⁽²⁾ 方言研究がまだ十分なされていないので、その実態は、現在進行中の研究成果を待たねばならない。

他方、ブラジルのポルトガル語について考える際には、地域方言（regional dialect）もさること

ながら、階層方言 (social dialect) に注目することが重要である。ブラジルは他のラテン・アメリカ諸国の例に漏れず、教育を受けたエリート階層と文盲が大半を占める民衆階層の間に大きな差異の存在する社会である。ルイテン (1985) によれば、ブラジル国民のほぼ半数は文盲である。また都市と地方の格差も大きく、民衆間には無文字文化の長い伝統がある⁽³⁾。このようなブラジルの状況は言語面にも反映している。例えば、Teyssier (1982: 79) はブラジルのポルトガル語の方言に関して次のように述べている。

"... as divisões 'dialectais' no Brasil são menos geográficas que socioculturais. As diferenças na maneira de falar são maiores, num determinado lugar, entre um homem culto e o vizinho analfabeto que entre dois brasileiros do mesmo nível cultural originários de duas regiões distantes uma da outra. A dialectologia brasileira será, assim, menos *horizontal* que *vertical*."

(イタリックは原文)

先にブラジルのポルトガル語の均質性を指摘した Thomas も、社会階層間の方言的差異が存在することを認めて、次のように言う。

"The language of such persons (引用者註 persons of lower cultural levels) differed considerably from that of more cultured classes, but syntactic differences were relatively few. (...)

But the difference was mainly a question of less variety of construction, although *there are certain syntactic forms peculiar to uncultured language*." (イタリックは引用者)

本稿では、以下、ブラジルの民衆階層の用いるポルトガル語に見られる統語上の特色である屈折の単純化について検討する。

1. ロマンズ語の一つであるポルトガル語には二種類の呼応規則がある。すなわち、1) 同一名詞句内の全ての要素 (副詞、前置詞などの不変化詞は除く) は、head noun の性、数、に一致する。2) 動詞は主語の人称、数に一致する。⁽⁴⁾ 以下、本稿では、1) の呼応規則を NPA(Noun Phrase Agreement)、2) を SVA(Subject-Verb Agreement) と呼ぶ (Guy 1981: 83)。

ポルトガル語では、NPA, SVA 両呼応規則ともに義務的 (categorical) である。従って、NPA, SVA 両呼応規則の適用例を示せば、次のようになろう。

(1) a.o aluno alto b.a aluna alta c.os alunos altos d.as alunas altas

(2) a.eu falo b.você fala c.nós falamos d.vocês falam⁽⁵⁾

このような、いわば「厳格な」呼応規則の適用は、ブラジルにおいては書き言葉、および教育を受けたエリート階層の人々の話し言葉では、ほぼ完璧である。しかし、その大半を文盲が占める民衆階層では、呼応規則に関して、かなり異なる様相を呈している。以下その内容を見る。

Teyssier (1982: 85) は、ブラジルに特有な語法を 1) *brasileirismos pertencentes à língua normal* 2) *brasileirismos pertencentes à registros sentidos como vulgares* に大別し、2) に属する語法のうち、呼応規則に関し、次のように述べる。

"Outro traço popular, ainda mais incorrecto, consiste em suprimir o -s, marca do plural, nos

nomes e adjectivos, e conservá-los apenas nos determinantes. (...) Quanto à flexão verbal, ela pode ser muito simplificada: (...) redução ao extremo do paradigma dos tempos"

Teyssier は例として次のようなものを挙げている。as casa, estes boi, meus amigo, mil cruzeiro; eu devo, ele deve, nós deve, eles deve.

このような異なる呼応規則が、ブラジルのポルトガル語では、社会階層間に存在する事実は、すでに多くの研究者によって指摘されてきた。さらに興味深い点は、このような民衆階層のポルトガル語に見られる「単純化」した屈折は一地域に限定されることなく、ブラジル全土（都市、地方を問わず）の民衆階層間に見られることである。⁽⁶⁾ そこで、このような民衆階層間に用いられる呼応規則は、次のようにまとめられよう。

(3) NPA に関して⁽⁷⁾

- a. 同一 NP 内の先頭の要素のみが、通常、複数標識の -s を示す。

例：estes boi, as casa

SVA に関して

- b. 動詞の活用形は 1 人称対非 1 人称のみの対立を示す。主語の人称（但し 1 人称単数を除く）と数とはもっぱら人称代名詞によって示される。

例：ele deve, nós deve, eles deve

但し 1 人称複数形の語末の -s を欠いた形式が出現することもある。

例：vamo(vamos), falamo(falamos)⁽⁸⁾

2. ブラジルの民衆階層の用いるポルトガル語に見られる「屈折の単純化」をめぐる、最近、いくつもの社会言語学研究が発表された。⁽⁸⁾ 民衆階層の NPA, SVA の適用の仕方を仔細に観察すると、必ずしも常に、複数標識の -s が脱落したり、主語の人称と数に呼応せず、無標の形式が出現するとは限らないことがわかる。そこで、Naro and Lemle(1976), Naro(1981) は民衆階層の用いるポルトガル語では NPA, SVA 両呼応規則が、標準ポルトガル語の場合とは異なり、変項規則 (variable rule) であるとみなす。以下、Naro and Lemle(1976), Naro(1981) の内容を要約する。

2.1. Naro and Lemle(1976), Naro(1981) は SVA を考察の対象とし、PBP では（以下 Guyl 1981 に従って、民衆階層の用いるポルトガル語を PBP —— Popular Brazilian Portuguese、いわゆる標準的なポルトガル語を SBP —— Standard Brazilian Portuguese と呼ぶことにする。）3 人称複数の主語と動詞間の呼応規則が消失しつつある (the rule is obviously well on its way to extinction) としている。さらに、「強調の原則」(principle of salience) というものを提案している。これは、対応する名詞類、動詞類の単数、複数両形式の音声的差異が強調されている度合が高ければ高いほど、NPA, SVA 両呼応規則の適用率が高くなるという原則である。例えば、ano-anos 類と lugar - lugares 類を比べると、前者の複数標識は / -s/ のみであるのに対し、後者は / -is/ が複数標識であるので、後者がより「強調」されていることになる。同じく、動詞の場合も come-comem 類と faz-fazem 類を比べると、やはり後者の方がより「強調」されていることになる。また、動詞の屈折語尾に強勢があ

る場合の方がより「強調」されていると考える。(cf. *comeu-comeram* : *come-comem*)

さらに、主語と動詞との表層構造上の位置関係も「強調の原則」によって分類され、主語が動詞の直前に立つ場合が最も「強調」されていると考える。(cf. *eles falam, eles. falam, falam eles*) すなわち、主語が動詞の直前に立つ場合に最も SVA が適用されるということになる。(但し、SVA の適用率は49.0%ほどである。)

さらに、Naro(1981)では、以下の4つの社会的要因をも考察の対象としているが、その結果は以下の通り。1)中産階級的文化を志向する者⁽⁹⁾はそうでない者よりも SVA 適用率が高い。2)年上の集団(35歳以上)のほうが年下の集団(25歳以下)より SVA 適用率がわずかに高い。3)性差は微少(わずかに女性のほうが高い。)4)出身地の別(リオ市か市外か)に統計上の有意な差はない。

Naro and Lemle(1976), Naro(1981)では、計量分析の結果、上記の「強調の原則」をもとにした予想が全て正しいことが証明されている。

2.2. 前述のごとく Naro and Lemle(1976), Naro(1981)は PBP から SVA が消失しつつあると説くが、その原因として、次のような仮説をたてている。以下に要約する。

1)言語変化に関して、次の段階を設定する。

a) ACTUATION, i.e. the beginning point, or first context, of a change;

b) DIFFUSION, i.e. the subsequent spread of the change to other environments.

Naro(1981:96)

2)変化の作動(actuation)は、PBP に存在する語末の鼻音を非鼻音化(denasalize)する変項規則の適用による。すなわち、SVA の適用率の最も低い動詞の類は、語末の鼻音が唯一の複数標識である。⁽¹⁰⁾ (例 *come-comem*) この類の動詞の複数形に非鼻音化の変項規則が適用されると(例 *comem*)、その結果は、単数形と同一の形式となる。(例 *come*)

3)この結果、非鼻音化規則をもつ話し手にとっては、単数、複数形の対立は一部崩壊することになる。この段階で、表層構造上 SVA の適用に関し、「再解釈」(reanalysis)が働く。⁽¹¹⁾

4)「強調の原則」にしたがって、単数形、複数形の表層構造上の差異が最小の動詞類からより大きな動詞類へと、この統語変化は拡散(diffusion)していく。

5)この結果、Naro(1976)で展開した「統語変化は表層の形式が(変化以前と以後で)一つ以上の統語上の分析を許すような環境から始まる」とする説が確認される。Naro(1981:97)

Naro and Lemle(1976:237)は上述のような変化を natural syntactic change と呼び、さらに次のように述べている。

"We use the word natural because, although we have no firm evidence, we suppose that syntactic change actuated by learned reaction or hypercorrection would work in the opposite way, turning up in the most salient environment. In fact, this would appear to be the case of any change which involves conscious imitation, such as the introduction of new items of slang."

Naro and Lemle(1976:237)

すなわち、二方向の統語変化があることになり、彼らの説では、PBPでは、(変化以前と変化後の生み出す環境が) 最小の環境からより大きな環境へと呼応規則に関して統語変化が進行中ということになる。

3. Guy(1981)はSVA,NPAの両方を対象とした計量分析を行なっている。さらに、SVAに関しては、2.2.で触れた非鼻音化規則(denasalization, 以下DN)が、またNPAに関しては、PBPに見られる語末の-sを削除する音韻規則(S-deletion, 以下SD)がそれぞれ関与しているとする。すなわち、os meus livros > os meu livroはNPAが適用されなかった結果なのか、音韻規則としてのSDが働いた結果なのかを、表層形式からだけでは判断ができないことになる。すなわち、本稿で取扱っている「屈折の単純化」に関しては、統語規則のNPA,SVAと音韻規則のSD,DNが交差していることになる。

Guy(1981)の計量分析の結果は、ほぼNaro(1981)と同様である、世代間に呼応規則の適用に関しての差異が見られないという点のみが、Naro(1981)との相違点である。

4. Guy(1981)は上記の計量分析の結果に、Naro and Lemle(1976), Naro(1981)とは全く逆の次のような解釈を与えている。

“A varying rate of agreement dependent upon the salience of the singular-plural opposition is exactly what we would expect to find in a decreolizing population which has moved part-way from the (presumed) proto-creole pattern of *no* agreement, toward the standard pattern of categorical agreement.” Guy(1981:296) (イタリックは原文)

この解釈によれば、PBPの話し手は単数、複数形式間の音声上の差異が最も大きな類から先に、SBPの特徴を吸収していることになる。従って、come-comem類よりも fez-fizeram, ê-são類のほうがSVAの適用率が高いということになる。PBPにおいて呼応規則が変項規則である事実は、社会的評価の低い方言の話し手は、標準語(standard language)の最も際立った特徴を先に取り入れることで説明される。このように、Guy(1981)はPBPの標準語と異なる諸特徴は脱クレオール化(decreolization)の過程を示すもので、「屈折の単純化」に関しては、Naro and Lemleの二分法に従えば、これは imitative change と呼ぶべき統語変化であるとの仮説を立てている。

5. Guy(1981)はその第7章(p.p.283-327)を“The Origin of the Popular Dialect”と題して、PBPのクレオール起源説の検討に当てている。そこでの議論を中心にして、以下、クレオール起源説を検討していきたいが、我々が留意すべき重要な点は、ブラジルのポルトガル語に見られる、ポルトガルのポルトガル語との相違点は、全てクレオール起源説で説明され得るのではないということである。すでに見たように、ブラジルのポルトガル語には、社会階層間で大きな相違が存在するが、クレオール起源説が適用できる可能性のあるのは、民衆階層の用いるポルトガル語のみであり、ブラジルのポルトガル語を扱う際には、決して一元的なとらえ方をすべきではないことは、以下の Mattoso Câmara からの引用でも明らかであろう。

“The explanation for the discrepancies between the received languages of Brazil and Portugal cannot be ascribed to a supposed Tupi substratum or a supposedly profound African influence, as has sometimes been suggested. Rather, these differences are essentially a result of the circumstances that the language is spoken in two geographically and politically separate territories. (...) *Of course, the popular dialects of Brazil are another matter.* In this case it is quite possible that an indigenous, although not necessarily Tupi, substratum and various African dialects might have had phonological and grammatical effects.”

Câmara(1972:21-22) (イタリックは引用者)

5.1. Guy は、2.2. で扱った Naro and Lemle の natural syntactic change 説との対比でクレオール起源説を検討している。そこでまず、natural syntactic change 説によった場合の問題点を、Guy に従って、検討してみたい。

PBP における 2 つの呼応規則、NPA, SVA の適用で注目されるのは、先ず第一に、単数、複数両形式の音声的差異の度合いによって適用率が異なること、第二に、SVA は主語の（表層上の）位置によって異なることである。Natural syntactic change 説に立てば、このような統語変化はポルトガル語史（のみならずロマンス語史）のなかで、PBP はきわめて特異な変化を遂げたことになる。また、もし Naro and Lemle の説くように、呼応規則が PBP から消失しつつあるのなら、1) 男性より女性の方が呼応規則の適用率が高いのは何故か。（すでに多くの社会言語学的研究の結果、男性に比べて女性の方が、より standard な形式を用いる傾向があることが示されている。Guy(1981:341) 2) かつて義務的であった SVA, NPA 両呼応規則は、何故、当該の語の統語上の位置によってその適用率が左右されるようになったのか。（NPA では何故常に同一 NP 内の先頭の要素のみが複数標識の *s* を示すのか。また SVA では、主語が当該の動詞の直前に立つ場合が最も適用率が高いのは何故か。Guy 1981:303）これらの点に妥当な説明が与えられなければならない。

5.2. 上記の点をクレオール起源説によって検討を加える前に、ここでの重要な概念である「脱クレオール化(decreolization)」を定義する必要がある。Rickford(1977:192) に従えば、以下のよう

“In *decreolization* the creolized varieties lose their distinctive features and begin to level in the direction of the original target language. This change occurs in the multilingual contact situation as the social and economic pressures to use the target language in more and more domains become increasingly pronounced, and as opportunities to master the language improve. A(post-) creole continuum of dialect varieties exhibiting varying approximations to the standard form of the target language is one typical result.”

「脱クレオール化」は当然、クレオールを前提とするのであるから、クレオール起源説にたつて「屈折の単純化」を説明するためには、ブラジルでクレオールが発生し、その後、脱クレオール化の過程を経たことを立証する必要がある。

5.3. Guyによれば、クレオール起源説に立つためには、言語上の証拠(Linguistic Evidence)のみならずブラジルにクレオールが発生するための社会的要因が歴史上存在したか、という点を検討する必要がある。(Guy 1981:286-287) これには、クレオールが発生し、現在もクレオールが存在する地域(ポルトガル語圏では、例えば、カーボ・ヴェルデCabo Verde)との相互比較も必要となるろう。

ある言語上の特徴が、かつてのクレオール化(prior creolization)の結果であるのか否かを決定する言語学上の確実な基準といえるものは、未だ存在しない。Guy(1981:287)しかしながら、ほぼ一般的に認められているクレオールの特徴というものを挙げることは可能である。Guyによれば、1) loss of inflection 2) levelling and regularizing of paradigms 3) elimination of morphophonemic alternations 4) tendency to convey grammatical information with free morphemes (Guy 1981:288)ということになるが、これらの点は、クレオール化に限らず、通常の言語変化にも十分見出されるものである。重要な点は、クレオール化においてはこれらの変化が、緩慢にではなく、ある時期に急激に起こることである。(Guy p.289)そこで、我々がクレオール起源説に立脚するのであれば、言語上の基準のみならず、言語外の史実をも考慮に入れる必要が出てくるわけである。

5.4. 以下、クレオール起源説に立脚してPBPに見られる「屈折の単純化」を検討してみよう。

1)「強調の原則」(cf.2.1.)「屈折の単純化」こそはピジン・クレオールの典型的な特徴であり、ポルトガル語を基盤としたクレオールのみならず、ほとんどすべてのピジン・クレオールに見られる特徴である。クレオール起源説に立てばPBPにおける呼応規則は、非標準語の話し手がいまだに十分に標準語の特徴を吸収していない結果であるとみなせる。単数、複数両形式間の差異の度合いが高ければ高いほど、呼応規則の適用率が高いのは、社会的評価の低い方言から脱する過程にある話し手にとって、最も早く吸収すべき特徴ということになる。この仮説は、あらゆる脱クレオール化の過程にある言語共同体(speech community)に適用できるのではないだろうか。

2)NPAについて 同一NP内の先頭の要素のみが複数標識の-sを示す現象は、他のクレオールにも多く見られる現象である。さらに、ブラジルに大量に流入した黒人たちの出身地域はBantu諸語圏であったと考えられているが、それらの言語において複数は接頭辞で表わされるという。Guy(1981:300-303)これもクレオール起源説の(間接的ではあるが)かなり有力な証拠となるのではないか。

3)SVAについて 主語と動詞の位置関係に関しては(cf.2.1), 主語が動詞の直前に立つ場合に最も呼応規則の適用率が高いという事実は、脱クレオール化の途中にある話し手にとっては、やはり、標準語の特徴として最も強調された位置ということになる。Guy(1981:303)従って、他の位置に比べれば最も早く呼応規則が修得される位置ということになろう。

その他、Guyはブラジルのポルトガル語に見られる大量のアフリカ起源の語彙、再帰代名詞seの不変化詞としての用法などを言語上の証拠としてあげている。Guy(1981:304-306)

5.5. 次に言語外の史実を検討してみよう。ブラジルで、ピジン・クレオールが発生するために

は、異民族との接触が前提となるが、候補となるのはブラジルの原住民（とりわけ Tupi 族）と奴隷としてアフリカから連れてこられた黒人たちである。そのうち原住民は、数の上でも劣勢であったし、社会的にクレオール化を引起こす状況にはなかったものと考えられる。(Guy p.285) 一方、黒人たちは逃亡を防ぐために、互いに異なる地域や部族の出身者が集められた。また、西アフリカでは15-16世紀にポルトガル系ピジンに接触していた可能性もあり、さらにブラジル民衆文化におけるアフリカの影響の強さを考慮に入れるならば、やはり黒人がブラジルにおけるクレオール化の担い手と考えるべきであろう。

5.6. PBP を他のポルトガル語を基盤としたクレオールや、ハイチ、ジャマイカなどのクレオール、および米国の黒人英語 (Vernacular Black English) と比べれば、より標準語に近いという事実を説明しなければならない。ブラジルの植民地時代初期には、黒人は少数派であったが、1850年ごろには総人口の70%近くに達した。その後急速に白人の人口が増加したことにより、脱クレオール化を急速に促進する状況になったものと考えられよう。(Guy p.316) またブラジルでは人種よりも社会階層間の差別のほうが大きく（もちろん黒人は下層階級に多いが）、黒人たちはプランテーション労働にも従事したが、家庭内の使用人としても頻繁に使われたので、標準語に接触する度合も、他の地域と比較すれば、高かったものと考えられる。従って、ブラジルでは他の地域と比べれば、脱クレオール化がかなり徹底して進行したものと考えられるのではないだろうか。

6. 以上、ブラジルの民衆階層の用いるポルトガル語に見られる「屈折の単純化」をめぐる、それを進行中の統語変化とみなす natural syntactic change 説と脱クレオール化の結果である post-creole continuum とみなすクレオール起源説を検討してきた。本稿では触れる余裕のなかったより rural な方言（例えば Amaral 1920, Rodrigues 1974 が記述した Dialeto Caipira など）をも考慮に入れば、PBP はやはり脱クレオール化の結果生じた方言の連続体であるという dynamic なモデルがより妥当性をもつのではないだろうか。ブラジルのポルトガル語をより多くの視点から研究すべきことを今後の課題として、ひとまず本稿の筆を置きたい。

1988.7.

註

- (1) Silva Neto(1977:16), Câmara(1972:20), Teyssier(1982:78) 参照。
- (2) ブラジルの方言研究としては、サンパウロ州内陸部の dialeto caipira（カイピーラ方言）を記述した Amaral(1920) が先駆的なものである。またブラジルの方言区分は Antenor Nascentes が提唱したもの (Nascentes 1953) が有名であるが、色々と批判もある。さらに Teyssier(1982:109) 参照。
- (3) 例えば、いわゆる Literatura de Cordel をめぐる民俗的事象を注目せよ。ルイテン（1985：24）参照。
- (4) さらに叙述形容詞 (predicative adjective) も主語の性、数と一致する。またポルトガル語には、不定詞が主語の人称、数により活用する、いわゆる「人称不定詞」(infinitivo pessoal) が存在するが、本稿では取り扱わない。
- (5) ブラジルのポルトガル語では、ほとんどの地域で、2 人称代名詞 tu, vós およびそれらに対応する動詞活用形（例、

- deves,deveis) は用いられない。従って、人称、数に関しては4通りのカテゴリーしか存在しないことになる。そこで, devo(- plural, + 1st person), deve(- plural, - 1st person), devemos(+ plural, + 1st person), devam(+ plural, - 1st person) のような分析を行なうならば, 3人称単数形(deve)は人称、数に関して「無標」の形式といえよう。
- (6) 例えば, Melo(1971:98-100), Silva Neto(1977:134-140) 参照。そこではブラジル各地からの報告が多数引用されている。
- (7) 性の一致に関しては, Rodrigues(1974:199-208) に記載されているインフォーマントの発話を分析すると, 次のような結論が得られる。同一 NP 内の head noun までは性の一致が見られるが, それ以降の要素は無標形式の男性形が出現する。例, A roupa meu nenhum 男性形を「無標」, 女性形を「有標」とする考え方については Martin(1975) を参照。ただし「性の一致」は「数の一致」とは異なる呼応規則であると考えられるので, 本稿では取扱わない。
- (8) ここで扱う Naro and Lemle(1976), Naro(1981), Guy(1981) の簡単な内容紹介は, 河野 (1983) 参照。ただし, これらの研究が対象としているのは大都市リオの PBP である。今回は, 他の地域に関する諸研究を十分に参照できなかった。今後の課題としたい。
- (9) 具体的にはテレビをよく見るか否かの差。ブラジルのテレビ番組は言語的, 文化的にもっぱら中産階級以上を対象としているようである。
- (10) 例えば come/komi/ に対して comem/komi/。ただし SBP では comem/komẽs/。語末の無強勢母音に関して PBP は異なる音韻規則をもつものと思われる。
- (11) すでに Naro(1976) で展開された統語変化のモデル。

引用文献

- Amaral, Amadeu(1920,3a. ed.1976): *O Dialeto Caipira*, São Paulo
- Câmara, J. Mattoso(1972): *The Portuguese Language*, Chicago
- Guy, Gregory Riordan(1981): *Linguistic Variation in Brazilian Portuguese: Aspects of the Phonology, Syntax, and Language History*, unpublished University of Pennsylvania Dissertation.
- 河野 彰 (1983) : 「ブラジルの言語学-- Naro, Guy の研究を中心に--」太田朗／フェリス・ロボ編 海外言語学情報第2号, 大修館書店所収
- ルイテン・ジョセフ (Luyten, Joseph M.) (1985) : 「ブラジル民衆詩の口承性」民博通信29号 (河野 彰訳)
- Martin, John W.(1975): "Gênero?" in *Revista Brasileira de Linguística*, No.1 Ano 1
- Melo, Gladstone Chaves de (1971): *A Língua do Brasil*, Rio de Janeiro
- Naro, Anthony J.(1976): "The Genesis of the Reflexive Impersonal in Portuguese: A Study in Syntactic Change as a Surface Phenomenon" in *Language* 52
- (1981): "The Social and Structural Dimensions of a Syntactic Change" in *Language* 57
- Naro, Anthony J. & Miriam Lemle(1976): "Syntactic Diffusion" in *Papers from the Parasession on Diachronic Syntax*, CLS, Chicago
- Nascentes, Antenor(1953): *O Linguajar Carioca*, Rio de Janeiro
- Rickford, John R.(1977): "The Question of Prior Creolization in Black English" in Albert Valdman(ed) *Pidgin and Creole Linguistics*, Bloomington & London
- Rodrigues, Ada Natal(1974): *O Dialeto Caipira na Região de Piracicaba*, São Paulo
- Silva Neto, Serafim da(1977): *Introdução ao Estudo da Língua Portuguesa no Brasil*, Rio de Janeiro
- Teyssier, Paul(1982): *História da Língua Portuguesa*, Lisboa
- Thomas, Earl W.(1969): *The Syntax of Spoken Brazilian Portuguese*, Nashville